


 ずいそう

大学で学生が化ける話

建山和由



先日、付属高校のPTAが集まれる会で話をするように申しつかりました。中学生、高校生の父母の方々が集まれる会です。「将来、大学に進むにあたって大学とはどういうところかを紹介して下さい」というご希望でした。普段、専門に関する話をするときとはずいぶん勝手が違い、何を話せばいいのかと話題探しに苦労しました。そのときお話ししたいいくつかの話題の中から、今日は、「大学で学生が化ける」という話を綴ってみます。

学生が化けると言っても、学生が学園祭で仮装をするわけでも、化粧が濃くなることでもありません。学生がある時期、急に成長するということです。この表現は、スポーツなどの分野で使われているようですが、我々もこれにならい「学生が化ける」と表現を使うことがあります。

中学、高校では、一般に先生が与えてくれる教材を一生懸命勉強します。この時期、我々はひたすら知識を増やすことに力を注ぎます。例えば数学の問題一つにしても、答えのある問題を如何に効率的に解くかを覚えていきます。この意味から、この時期は、自由度の低い時期であるといえます。決して批判しているわけではなく、知識の集積を図るには必要な時期だと思っています。

一方、社会に出ると、自由度は大きく広がります。与えられた仕事をこなすのに自由度なんてあるものかと思われる方もおられるかもしれませんが、仕事では必ずしも特定の答えが用意されているわけではなく、アプローチの方法もあれこれ工夫できます。自分で工夫と選択を行える自由度とともにそれに対する責任も増えるのが社会といえます。大学は、自由度の極端に低い中学・高校時代と自由度の大きな社会との間を埋める緩衝材的な役割を果たしているといえます。

具体的に例を挙げてみましょう。大学では、カリキュラムは自分で選択することができます。自分でとりたてた授業や先生を選ぶことができます。授業も高校のよ

うに教科書に書かれている内容を丁寧に教えられるのではなく、先生の専門で内容も変わってきます。最近では、大学も評価されるようになり以前に比べると縛られているという雰囲気が増えてきましたが、高校に比べると自由度は大きいことは確かです。卒業研究は、その最たるものです。卒業研究では、答えの決まっていない、あるいは時として答えなど無い問題に取り組んでいきます。アプローチの方法も自分で工夫せざるをえません。この意味から学生にとっては自由度が非常に大きな教育といえます。

担当の先生によっても異なりますが、卒業研究では、4月に研究室に配属されてきたらまず本人と相談してテーマと大まかな方針を決めます。その後、その進捗について打ち合わせをすべく、定期的にゼミを開いて彼/彼女らに研究の進め方を発表してもらいます。4年生ですから知識も限られている上に論理的な思考も養われていない場合が多く、普通は、あれこれ問題点とその理由を指摘されて再考するように言われます。これを毎週繰り返していく訳ですが、繰り返すうちに彼/彼女らもあれこれ考えるようになります。「これだここを指摘されるだろう」、「これだここで行き詰まる」等々です。毎日毎日そればかり一生懸命考えていると、そのうち、こちらの指摘にも的確に答えられるようになり、時として感心させられるアイディアを出してくる人も出てきます。学生が短期間に集中して考えることにより急にしっかりしてきたときに我々はその学生が「化けた」と感じます。もちろん、研究室に入ってくる前に既に化けている人もいれば、卒業研究を終わっても化けられない人もいますが、卒業研究の期間に学生が化けたと感じることは、我々に大学教育の意義を改めて認識させてくれます。学生に如何にしてうまく化けてもらうかを我々は日々考えています。